

【カマタマーレ讃岐賞】

「僕にできること」

三豊市立仁尾中学校 二年 田渕里一

みなさんは、骨折したことがありますか？僕は足を骨折したことがあります。このときは、いつも当たり前前にできていたことができなくなつて苦痛を感じる日々でした。

中学校に入学して早々に、僕は慣れない自転車で姿勢を崩して骨折してしまいました。足はギプスで固定され、松葉杖をつきながら歩きます。そんな僕を見て、クラスメイトや先生はとても気にかけてくれました。まず、朝学校に着くと一年生は三階まで上がらないといけません。友だちは荷物を持って運んでくれたり、床に置いてある荷物を端に寄せてくれたりしました。階段を上るだけでも大変だったので、重い荷物を持ってくれてとても助かりうれしかったです。教科係の仕事で次の準備物を先生に聞きに行くときは職員室まで行くのも大変だろうと代わりに聞きに行ってくれたり、日直の仕事で明日の時間割を確認するのを代わってくれたりとてもありがたかったです。

とても助かる、ありがたいという反面、みんなが余分に動かなければならなくて申し訳ないという気持ちになってきました。骨折していてもできることはないだろうか。僕はたくさん考えました。しかし、歩くという動作は当たり前前で、歩かずにできそうな仕事は一つ二つしか思いつきませんでした。とりあえず、そのできそうな仕事をやってみましたが、簡単な仕事なのですぐに終わってしまいました。その間も、みんなはずっと動いて仕事をしてくれていました。僕は座って見ているだけでした。このままここにいてもいいのかなという気持ちになりました。

そう悩んでいると、あるクラスメイトが「お前が完治するまで俺が

お前の仕事をするから、完治したら一緒にがんばろう。」と声をかけてくれました。この言葉を聞いて、僕の気持ちはふっと楽になってとても安心しました。何となく教室に居づらくなっていた僕にとつて、その言葉は救いでした。それからは気持ちを切り替えて、手伝ってくれたら素直にありがとうと伝え、自分にできることを見つけて動けるようになりました。

僕は曾祖母と暮らしています。九十三歳になるけれど、畑仕事をしたり自分で何でもしたりとても元気です。夕食後の洗い物もしてくれようとするのですが、一日終えて疲れているだろうと思い「やるから大丈夫。置いておいて。」と食器洗いを代わると何だか寂しそうな顔をします。僕は骨折をした経験から、ただ「大丈夫。やるよ。」と言うのではなく「ありがとう。夜は洗うから、朝とか急ぐときはお願い。」と声をかけるようにしました。そうすると、曾祖母も「ありがとうな。頼むわな。」とほほ笑んで言ってくれるようになりました。

自分にもできると思っていることをやってもらったとしても、自分の役割を取られてしまったような感じがしてすごく悲しい気持ちになります。ただ仕事を代わってあげるのではなく、「こういうときはお願い。」と相手をお願いすることで、手助けされる人も疎外感や無力感を感じずに周りを頼れると思います。そうしたら、自分がするべきことにも前向きに取り組めるようになると思います。困っている人に手を貸すことは大切だと思います。けれど「困っているだろうから全てやっであげよう」と決めつけてしまうと、相手は何もできないのにここにおいていいのかなと疎外感を感じるかもしれません。それにもかかわらず、自分は親切にしてあげたつもりになっても、助けられた側は何もできない弱者と決めつけられて仕事を奪われたと怒りや悲しみを感じているかもしれません。僕も友だちのあの言葉がなければ、自分には価値がない人間だと悲しい気持ちのままだったと思います。そ

の気持ちがどんどん大きくなって、生きることが辛くなっていたかもしれません。取り返しのつかない結末になっていたかもしれません。その人のやり方や考え方があるのにそれを無視して自分の考えを押しつける小さな違和感が大きな亀裂になり、人を信じられなくなってしまうかもしれません。そうならないようにするために、相手の思いを聞いて寄り添うことが大切だと思います。

これから困っている人や悩んでいる人がいたら、自分がやってもらったように相手がどうしてほしいのか考え、何をするのがベストなのか相手に確認しながら手助けしようと思います。誰もが気持ちよく生活できるように。